

第6回多喜二祭開催される



3月17日、第6回愛知多喜二祭が開催されました。

愛知革新懇が取り上げて拡散につとめてくれたことも

手伝つて、過去最大規模の集会になりました。

今回は、多喜二とともに同じ時代を短くも壯絶に生きた、地元愛知出身の岩田義道が企画のメインに据えられました。

国賠同盟会員でもある平井さんが講演され、平井さんとともに、岩田義道の地

元の一宮・稻沢地域で「岩田義道研究会」の活動を続いている人たちなどが、平井さんのシナリオをもとに朗読劇を演じました。

多喜二祭は、優れた文学者でもあつた小林多喜二の足跡に学ぶとともに、戦争と貧困に命がけで立ち向かつた闘いを受け継ぐ趣旨で、全国各地でも同様の取り組みがされています。今回、

私と岩田義道

自分と岩田義道の出会い

平井さんが愛知多喜二祭で行つた講演を、当日配布された資料とともに要約、加筆して紹介します。

の先人の足跡を学び語る集会として開かれたことは、とても意義深いことだと言えます。

じつさい、参加者の多くから「地元にこのような人がおられたことを知らなかつたが、多くを学ぶことができて良かった」との感想がきかれました。

国賠同盟がもつともつと大きく根を張り、活動の枝葉を広げていかなければと、自省をこめて受けとめた次第です。

愛知県本部会長 西田一廣

は、「赤旗」に載つた岩田義道の墓前祭が行われたという短い記事です。自分と同じ一宮の小学校の教師だったことに心が動きました。愛知の管理教育のもとで、やりたいことは何一つ出来ず、やりたくないことばかりやらされる、そんなとき、権力に立ち向かつて命をかけた先輩がいたことを知つて驚き、弱い私は、岩田に強い関心を抱いたのです。地元の岩田義道研究家の加藤義信氏から、「自分はもう書けない。あなたのような女性が書けばきっと多くの人が関心を持つてくれる」と言われ、岩田の墓や生家跡、勤務した学校（現木曽川西小）に案内してもらうとともに、岩田にとつて非常に重要な二人の女性の事を聞かせてもらいました。松山高校時代結婚した、



2024.03.17

宮本きくよと、死の一年半ばかり前、共に地下活動をした伴侶、阿部淑子のことです。

その後、阿部

さんに会うこと

ができました。

岩田の資料を探し歩いていたとき、東京の「赤旗祭り」で治安維持法犠牲者国

家賠償要求同盟のテントを見つけ、そこで阿部

淑子さんが当時九歳でお元気だと聞き、翌日さつそく会いに行つたのです。

阿部さんは急な訪問を心から歓待していただき、

心が動かなければ行動は起きない

二日間にわたって当時の地下活動の様子を私に話されたのでした。

それから一宮、稻沢の有志が「岩田義道研究会」を誕生させました。初代会長は稻沢の市会議員だった飯田勇氏、国賠愛知の元会長として尽力された方です。彼の手腕は見事で、京大図書館の資料から松山高等学校時代の資料など、次々に入手し、研究会の会報も発行されるようになりました。

失意のある日、同郷の友人、

山田盛太郎から、河上肇の『社会問題研究』を見せられ、「進むべき道はこれだ」と意を決しました。義道の志が生まれ、彼の思想が深まり、確たる信念への道がはじまつたのです。

地下活動、死。そのあとを私たちには

岩田義道は、「日本の将来を背負つて立つ、前途有望な少年少女を教育するため、自分の一生を捧げたい」

と師範学校に学びました。

しかし学校の現場では、貧困のため勉強の時間どころか栄養不良で課外授業にも堪えられない子どもが多いことに直面します。そこから「裕福な家の息子は実力がなくとも、蔓の力、金の力で鰐上りに上の学校に行き得るのに、一方之れと正反対の事実を見せられ全く自分の考えは行き詰まつたのであります」と悩む日々でした。

平井さんの著書 風媒社刊



体重六四キロ、身長一六〇センチ、脳髄一四四五グラム、心臓三七五グラム。右心室は拡大されていて心筋

やしがつたと伝えられています。

阿部淑子さんはその間、獄中にありましたが。何も知られず、葬儀に出られず、葬

さりき

「岩田義道氏 三五歳。
岩田義道

阪、名古屋の慰靈祭も同じ有様でした。

（平井さんが講演用の資料で紹介された七首のうちから）

激しい拷問の末、十一月三日、命を失つたのでした。遺体の解剖所見にはこうあります。

一切が報道禁止で、何事も出ませんでした。葬儀は五五〇人の警官にかこまれ、葬儀委員も会葬の労働者もすべて検挙されました。大

阪、名古屋の慰靈祭も同じ有様でした。三か月後に同じ運命をたどる小林多喜二はこの時、義道の死を歎きしりしてく

（平井さんが講演用の資料で紹介された七首のうちから）

義道と多喜二、二人に私たちは続かなければなりません。彼らが見つめていた光、光は希望。誰にでも温かい、どこにも注いで、リズムを通せば赤は赤に、青は青に、それぞれの色を活かしてくれる。

私たち二人の後に、日本を、ここで誓いたいと思います。



講演する平井利恵さん

一九三五年一月に病氣で保釈になるまで、刑務所暮らしへ余儀なくされました。

寝もやらず、君が記せし反戦の論文「赤旗」